ファンダメンタルズ分析　穀物編　基本的な需給要因

値決め大前提は天候相場

新・商品先物入門 ⑯

日本商品先物振興協会
小島 栄一

商品先物取引の経験がない方でも、一度は「天候相場」という言葉を耳にしたことがあるのではないでしょうか。商品の価格を決めるのは需要と供給のバランスですが、農産物に関して、天候は供給の源である生産を左右する最重要ファクターとして作用します。このため大豆やトウモロコシなどの農産物先物取引では天候は決して無視できないファンダメンタルズに位置づけられているのです。

ラサール街では雨

大豆とトウモロコシの先物取引は、いままさに天候相場の渦中にあります。そうした中で農産物トレーダーが注目するのは、主産地である米国コーンベルト地帯の天気図と気象ニュースです。

コーンベルトは米国中西部のインディアナ、オハイオ、ミシガン、イリノイ各州を中心に広がる農産物の一大生産地帯。食料自給率が低い日本は大豆とトウモロコシもほとんどが外国頼りで、その主たる輸入先が米国です。このため国内の商品取引所で取引されている大豆とトウモロコシも国内産ではなく米国産で、従って気にするべきは米国の天候という図式なのです。

大豆とトウモロコシの高値要因とUSDA重要データ

	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1月
大豆の高値要因	【暖冬・雪不足】来春の土中水分不足	【寒波・降雪】収穫放棄	【長雨】収穫遅れ	【早霜・多雨】成熟不良、霜被害	着サヤ不良	【高温・乾燥】生育、受粉	【乾燥・低温】発芽、生育不良	【長雨】作付遅れ		【少雨】土中水分の不足		
USDA発表		生産高	生産高	生産高	生産高		作付面積			作付意向面積		（前年の）最終生産高
トウモロコシの高値要因	【長雨】収穫遅れ	【寒波・降雪】収穫放棄		【暖冬・雪不足】来春の土中水分不足			【高温・乾燥】生育、受粉不良	【乾燥・低温】発芽、生育不良	【長雨】作付遅れ		【少雨】土中水分の不足	

米国の大豆の作付けは5～6月に、トウモロコシはそれよりもやや早い4～5月に行われます。作付期に好天に恵まれれば、作付けが早く完了する分、長く生育期間を確保できます。そうなると夏の高温期の前に受粉期が到来し、仮に降雨が極端に少なく干魃（かんばつ）となった場合でも、被害を受ける可能性が小さくなり豊作を期待できるのです。もちろん相場にとっては「弱気」を意味します。

受粉期は生育過程で最も大量の水分を必要とします。いまがその時期ですが、ここで産地が高温乾燥の気象に見舞われると干魃の懸念が高まり、相場を高騰させることとなります。実際に何年かに一度の割合で懸念が現実になるのですが、その過程で適度な降雨がもたらされると、今度は一転して不作の解消が取りざたされ、相場は急落に見舞われます。

米国には「ラサール街では雨」という言葉があります。産地ではきのうと変わらず晴れているのに穀物相場が下落しているとき、農家の人々がシカゴにある世界最大の農産物先物市場（住所がラサール街西141番地）を揶揄（やゆ）して使う表現です。

データの宝庫 USDA

大豆とトウモロコシの需給を示す、あるいは需給を推測する根拠となるさまざまなデータが定期的に公表されています。代表的な公表機関は米農務省（USDA）で、3月末には「作付意向面積」が示されます。

大豆とトウモロコシの耕作地は共通しているため、一方の作付面積が増えれば必然的に他方は少なくなります。

農家は通常なら4月以降にトウモロコシの作付けを始めるのですが、その時期に長雨に見舞われると、もともと予定していたトウモロコシを大豆に切り替える可能性があります。そうならトウモロコシには「強気」、大豆には「弱気」に作用するはずです。

実際の確認は6月末の「作付面積報告」を待たなければなりませんが、それまでに複数の民間機関が独自の調査報告を公表するため、トレーダーはその数値に一喜一憂するのです。

収穫が済んだ10月以降は輸出国としての米国の在庫の増減が焦点となります。加えて南半球の生産国であるブラジルとアルゼンチンで作付けが始まりますから、その動向が注目を浴びるのです。